来賓講話　「最優先課題となった憲法改正！」　　髙橋利行先生

髙橋利行先生

〔政治評論家、読売新聞元世論調査部長、解説部長、論説委員〕
東京都出身、昭和１８年生。中央大学法学部卒業後、讀賣新聞社入社。地方部・社会部を経て、政治部記者として田中派・竹下派・橋本派を中心に担当。外務省、自民党、首相官邸記者クラブキャップを経て、平成元年政治部次長。その後、世論調査部長、解説部長、論説委員、編集局次長、新聞監査委員長を歴任。平成１５年に退社後は、政治評論家として活躍。

皆様こんにちは、政治評論家の高橋利行です。

今日は10連休のど真ん中、「新しい憲法をつくる国民大会」に駆けつけていただき、本当に感謝しております。

今年は憲法施行７５年ということで期待しています。日本の歴史学者の研究では、歴史上７５年とか８０年という周期で世の中が大きく変わってきている、とのことです。例えば、１６１５年に大坂夏の陣が終わり、江戸幕府体制が固まった。８０年後の１７００年には宝永の大地震、富士山の噴火があり、それから８０年がたつと天明の大飢饉、寛政の改革、さらに８０年たつと１８５５年の黒船来航、と大体７５年から８０年の間隔で、日本の歴史が大きく変化しており、１８６０年の次は１９４０年ですが、ご承知の通り太平洋戦争はその前後で始まっている。そして今年２０２２年は、コロナ禍に苦しみ、そしてロシアによるウクライナ侵攻、と今、大きな変化の中にある。

７５～８０年おきに大きな変化があります。

今年の２月２４日ロシアがウクライナに侵攻した。これには本当に驚いた。何しろ第二次世界大戦後の世界の秩序は、戦勝国で核を持っている五大国が安全保障理事会の理事国として、世界の安寧秩序・平和に、責任を持つという枠組みを作っていたわけです。これまでも小さな紛争は数多くありましたが、今回、五つの常任理事国、核を持った５大国の一つが、自ら侵略戦争を仕掛けている。

毎日毎日、テレビでは、死体が転がっている様子や女性や子供が片っ端から殺されているのが報道されている。こんな惨劇が２１世紀になって起こるのだろうか。特に五大国、アメリカ・イギリス・フランス・ソ連(ロシア)・中国は、国益も違っていたが、人類が平和に暮らせる方向で協力していると見られ、今日まで、五大国が大きな戦争を起こさないできた。それが一転してしまった。すなわち第二次世界大戦で作られた大きな枠組みが変

わってしまったのです。

今日の講話のため、多くの人にお話しをうかがった。その中で３０ぐらいの問題点が出てきました。例えば、ウクライナの惨劇を見て、「日本にもキチンとした軍隊が必要ではないか」「プーチンは核のボタンを押すのか」「いざと言う時、アメリカは日本を助けるのか」「アメリカの核の傘に入って良かった」「日本も核武装が必要ではないか」「独裁国家は恐ろしい」「国連は何の役にも立たない無用の長物だ」「ウクライナの次は台湾なのか、北海道に攻めてくるのではないか」、そして「ロシアはかつてクリミアを五日間で占領したので、もっと強いと思っていたら意外と弱かった」といった意見がありました。さらに「テレビを見ていると、ウクライナでは女性も含め鉄砲や小型のミサイルを撃つ訓練をしています。我々はそういう事を何もしていない。いざという時にできるのだろうか」というような様々な話を聞かせていただきました。

では、日本はどうすればよいのか。そこで考えたのは、一つ目が、自衛隊を明記しなければならないこと、二つ目は核兵器をどのように考えるか、という問題、三つ目は憲法改正を進めていく環境をどう作ってゆくのか、という政治問題があります。それには、ともかく今後、憲法を改正するということで、どのようなことが考えられるか、というと、まず一つは、７月に参議院選挙が行われます。一般的には、自民党と公明党で合わせて５７議席をとることはでき、参議院の過半数を制すると言われますが、憲法改正を規定する憲法第96条の中にある三分の二以上をとるために、一議席でも多く獲得し、憲法改正につなげていってほしい。

そして、本当の戦いは３年後の2025年。前年に総裁選挙、夏にまた参議院選挙があり１０月の衆議院議員の任期満了までに、衆議院選挙もやる。ダブル選挙も想定され、２０２４年の１０月から１年間が決戦の場になる。

そのためにも、この７月の参議院選挙、過半数で良いなんてことではなく、憲法改正勢力を１議席でも多く今からとっておかなければならない。この「新しい憲法をつくる国民大会」参加の皆さまには、ここで得られた知見を活かし、情熱を傾けて、その第一歩として、今度の参議院選挙で、自民党を勝たせることに、全力を挙げましょう。

このごろは、憲法審査会もだいぶ進んでます。私から見ると、まだまだ足りないと思うが、一切、論議に応じなかった時代と比べると、随分と進んできた。そしてウクライナ侵攻を目の当たりにしてなにもしなくても良いなんて人はいない。それを受けて、憲法改正の可能性が高くなってきた。ぜひともこのチャンスを逃さずに憲法改正に突き進んでいただきたい。ここに来られている平沢先生をはじめ、我々も、憲法改正に向けて力を結集していきたいと思っている。

ここで憲法改正ができなかったら、なかなかできるチャンスが来ないであろうと思っている。どうかこのチャンスを逃さないように、新しい憲法体制を作っていくことを心から念願して、御挨拶とさせていただきます。

（拍手）